

山村集落にたつ民家と里山林利用についての研究

—長野県北安曇郡白馬村北城青鬼を対象として—

鍋田莉江（信州大学工学部建築学科）、土本俊和（信州大学工学部建築学科・教授）、
井田秀行（信州大学教育学部・准教授）

はじめに

民家と里山には、風土にあった相互関係が存在する。伝統的な民家の構造材に用いられる樹種の種類を把握することにより、その地域と民家の建設時の周辺の山との関係を捉えることができる。

これまで井田秀行による「豪雪地帯における伝統的な民家と里山林の構成樹種にみられる対応関係」^{注1)} や中尾七重・布谷知夫による『民家は何の木でできているか』^{注2)} など、地域性を示す民家の構造材と里山の関係性についての研究がなされてきた。

今回、長野県北安曇郡白馬村の北東の山腹に位置し、平成12年（2000）に重要伝統的建造物群保存地区に選定された青鬼集落にたつ民家を対象とした民家建築と里山林の利用について研究する。青鬼は江戸時代後期から明治時代後期にたてられた伝統的な民家群が集落を形成している。調査をおこなったH.E家住宅は、弘化4年（1847）の善光寺大地震の際に屋根の檜首が外れたと伝えられている。そのため建築年代は、江戸時代後期まで遡る可能性がある^{注3)}。

また、青鬼の位置する白馬村は、火災・台風・積雪・地震といった自然災害が多い土地である。白馬村山中の厳しい自然環境のなか、青鬼集落が伝統的な姿をのこし続けているのは、民家をたてる際に、各部材の使い道にあった樹種選定がおこなわれたためと考えられる。樹種判定をすることで、青鬼の風土にあった部材の樹種を把握し、民家がたてられたと思われる200年前の民家と里山の相互関係について考察する。そして、現在の青鬼集落周辺の植生環境下において伝統的な青鬼民家の建築が可能であるかを検討する。

研究方法

まず、民家調査をおこなう。H.E家住宅において、実測調査、部材寸法計測、樹種判定をおこなう。樹種判定の手法^{注4)} は、まず、2mm角のサイコロ状に切り取った部材切片を柔らかくなるまで湯がき、その後、カミソリで木口・柾目・板目の三断面に薄く削り取り、顕微鏡で観察する。観察対象である切片組織は、細胞組織による分類と、サンプル写真との比較により樹種の判定をおこなう。

次に、周辺調査をおこなう。民家を構成する樹種と青鬼の植生図から当時の里山林利用の考察をする。また、現在の青鬼集落周辺の樹木の直径と建材に使える可能長を計測する。

【注】

1) 井田秀行・庄司貴弘・後藤彩・池田千加・土本俊和「豪雪地帯における伝統的な民家と里山林の構成樹種にみられる対応関係」（『日本森林学会誌』92(3)、139-144頁、2010年）

2) 中尾七重・布谷知夫『民家は何の木でできているか』（川崎市立日本民家園、2011年）

3) 宮澤智士『長野県北安曇郡白馬村白馬桃源郷青鬼の集落』（財団法人日本ナショナルトラスト、1997年）参照

4) 伊東隆夫・島地謙『日本の遺跡出土木製品総覧』（雄山閣出版、1988年）参照